

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第10集

国指定史跡

銚子塚古墳附丸山塚古墳

—保存修理事業第1・2年次概報—

1985. 3

山梨県教育委員会

序

甲府盆地の南東縁、笛吹川左岸の曾根丘陵一帯には、先土器以来の遺跡が濃厚に分布していますが、特に中道町は山梨県における古墳文化発祥の地として知られております。この国指定史跡銚子塚古墳・丸山塚古墳を含む約40haの地が、先年山梨県風土記の丘建設地に定められ、1976年以降、風土記の丘建設委員会、次いで同整備委員会が、その建設整備の基本計画を審議して参りました。

その結果、まず前記両古墳の保存修理事業が1983年から4カ年計画で施行される運びとなり、現在当埋蔵文化財センターが、専門の諸先生のご指導のもとに調査を実施いたしております。本報告書は83・84両年度の調査・整備結果の概報ですが、丸山塚古墳の石室調査には特に注目すべき成果があり、今後に期待がかけられております。

末筆ながら、お世話になった関係機関各位、ご指導を賜わった諸先生、直接調査に当たられた皆様方に厚く御礼申し上げます。

1985年3月31日

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

目次

I 整備事業の概要	1
II 周辺の地理的・歴史的環境	2
III 昭和58年度保存修理事業の概要（第1年次）	3
IV 昭和59年度保存修理事業の概要（第2年次）	7
V おわりに	13

例言

1. 本書は山梨県東八代郡中道町に所在する史跡銚子塚古墳附丸山塚古墳の国庫補助を受けた保存修理事業計画（4年計画）の第1年次および第2年次の整備事業の概報である。
2. 本書の執筆は、I. 整備事業の概要を田代孝が、それ以外を坂本美夫が担当した。
3. 実測図、出土遺物の整理は、坂本美夫、宮沢公雄を中心に行なった。
4. 実測図、写真、出土遺物は山梨県埋蔵文化財センターに保管されている。

I 整備事業の概要

1. 整備事業の計画

山梨県東八代郡中道町下曽根に所在する前期古墳の鏡子塚古墳と丸山塚古墳は、県内最大規模の前方後円墳および円墳として注目され、昭和5年2月28日国指定の史跡となっている。この地は昭和49年度に風土記の丘公園を建設することが構想され、建設省の都市公園「曾根丘陵公園」とあわせて40.4haの買収が進められており、県教育委員会では、史跡部分の買収および整備を行なうこととなった。史跡部分の買収は昭和52、53年度の2カ年で行なったが、整備については昭和51年度以降風土記の丘建設委員会、57年度以降は同整備委員会において、基本計画が策定され、その結果昭和58年度から昭和61年度にかけてその保存修理事業が実施されることになった。

昭和58年度は、鏡子塚古墳、丸山塚古墳の墳丘と周溝の遺存状況確認のための考古学調査を実施し、あわせて史跡境界杭の設置と史跡説明板の設置、および200分の1の航空測量図の作成を行なう。

昭和59年度は、丸山塚古墳の石室位置および形状調査を行ない、丸山塚整備実施設計委託、墳丘の段築状態、周溝、周堤の検出調査を実施する。整備では丸山塚墳丘の整形、芝張、園路整備、石室位置表示、墳丘上排水工を行なう。

昭和60年度は、鏡子塚、丸山塚の中間地帯の発掘調査、鏡子塚古墳の石室位置および形状調査を実施し、墳丘の段築状態、埴輪、葺石および周堤の位置確認を行なう。あわせて丸山塚周溝の砂利敷、周溝外側の植栽、鏡子塚と丸山塚の中間地区の芝張、植栽、園路の整備と休息施設の設置を行なう。

昭和61年度は、鏡子塚古墳の整備として墳丘整形、芝張、園路、植栽、葺石、石室表示と周溝部排水工事、砂利敷および周堤部植栽を行なう。

なお、この整備事業の監理は、県土木部に依頼し、石和土木事務所において実施する。

以上4カ年度にわたって整備事業を行なう計画である。

2. 整備および調査組織

(1) 整備委員会組織

○会長 井出佐重（文化懇話会々長、県立考古博物館協議会々長）

○委員 植松又次（県文化財保護審議会委員）、斎藤忠（大正大学名誉教授、文化庁文化財保護審議会専門委員）、佐藤八郎（県文化財保護審議会委員）、谷口一夫（日本考古学協会員）、山本寿々雄（同）、花岡利幸（山梨大学工学部教授）、田畑貞寿（千葉大学園芸学部助教授）、植松春雄（県文化財保護審議会委員）、櫻井健一（中道町長）、土屋清夫（中道町議会議長、昭和58年度）、平川義照（同、昭和59年度）、長田章（中道町教育長）、清水治雄（中道町文化財審議会長、昭和58年度）、長田新治郎（同、昭和59年度）、清水泰夫（県土木部技監、昭和58年度）、小倉健（同、昭和59年度）、河澄力（県教育次長、昭和58年度）、板井茂（同、昭和59年度）。

- 文化庁 加藤允彦
- 設計 ㈱丹青社 (59年度)
- 監理 山梨県土木部石和土木事務所 石原春人
事務局 県教育庁文化課、県土木部都市計画課

(2) 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査指導 斎藤 忠 大正大学名誉教授 文化庁文化財保護審議会専門委員
山梨県風土記の丘整備委員

大塚初重 明治大学教授 岩崎卓也 筑波大学教授

本村豪章 東京国立博物館原史室長

調査担当者 山梨県埋蔵文化財センター文化財主事 田代孝、小林広和、坂本美夫

調査参加者 佐野勝広 (日本考古学協会員)、宮沢公雄 (法政大学)、林部光 (奈良大学)

II 周辺の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

甲府盆地南東縁にほぼ沿うように、北東から南西に向って流れる笛吹川の左岸には、沖積地をはさんで東西約12.5kmにわたり、曾根丘陵が続いている。この曾根丘陵は御坂山地の前面に展開する標高270~400mの丘陵地帯で、丘陵の前縁は急傾斜で平地に落ちこんでいる。また丘陵は、御坂山地に源を発する七覚川、滝戸川、芋沢川などの中小河川によって侵蝕され、

幾つかの舌状台地を形成している。このうち滝戸川と間門川に挟まれた南北約2km、東西約1kmの台地の先端に東山(340.2m)が存在し、この東山山麓に分布している古墳群を東山古墳群と呼称している。銚子塚



第1図 周辺地域の遺跡分布状況

古墳および丸山塚古墳は、この一角であり、丘陵と平地が接する傾斜変換線上の標高255m付近に位置している。

2. 歴史的環境

本墳の所在する曾根丘陵は、先土器時代以来の遺跡が濃密に分布することで知られている。中道町地域に限って見ても先土器時代の立石遺跡・米倉山遺跡、縄文時代の上の原遺跡・城の越遺跡、弥生時代の米倉山遺跡、特に古墳時代に至ると東山古墳群・米倉山古墳群・金沢古墳群などの本県を代表する古墳群が作られる。

東山古墳群には、銚子塚古墳（前方後円墳）・丸山塚古墳（円墳）・大丸山古墳（前方後円墳）、米倉山古墳群には本県最古のしかも唯一の前方後方墳と考えられる小平沢古墳、金沢古墳群には天神山古墳（前方後円墳）など、本県における最古で最大級に属する古墳が集中している地域であり、この地が古墳時代の前半代に、本県の中核地を形成していたことを物語っている。

さらに東山古墳群の後背地には、弥生時代から古墳時代にかかると考えられる多数の方形周溝墓が検出された上の平遺跡やその集落址の一部である立石・宮の上遺跡等が存在し、本県の古墳出現期の過程を考えるうえで、欠くことのできない存在となっている。

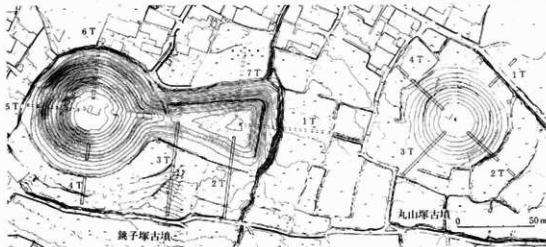
III 昭和58年度保存修理事業の概要（第1年次）

1. 予算関係

58年度保存修理事業は、国庫補助対象経費500万円を受けて、考古学調査（1,508千円）、史跡境界杭設置（292千円）、史跡説明板設置（200千円）、それに航空測量（3,000千円）を実施した。

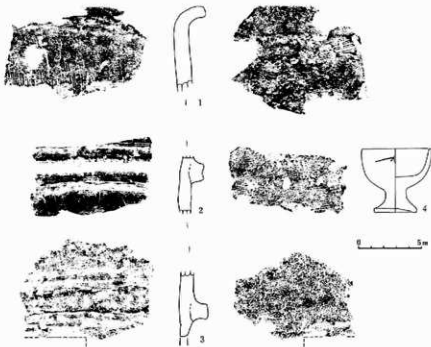
2. 考古学調査

銚子塚古墳、丸山塚古墳の墳丘遺存状況、範囲確認の予備調査を、昭和58年12月16日より、昭和59年2月21日の期間に行なった。トレンチによる発掘調査とし、銚子塚古墳に3本、丸山塚



第2図 トレンチ配置図

古墳に4本、計7本を設定した。調査の結果、墳丘は削平が相当進んでいる状況が捉えられ、周溝内の推積が著しいことが確認された。この中で銚子塚古墳の2、3号トレンチ、丸山塚古墳の1、2号トレンチにおいて、周溝の外側の立上りと考えられる地点が検出された。また銚子塚古



第3図 銚子塚古墳出土遺物

墳後部の第4号トレンチでは、葎石と考えられる礫が検出された。墳丘裾付近から埴輪片、陶磁器片が出土した。

3. 整備事業関係

航空測量は、史跡範囲を含む200×400m (80000㎡)について行なった。国家座標に組み込み、縮尺1/200、25cmコンタで実施した。なお測量図は山梨県教育委員会に保管してある。

史跡境界杭は、史跡名勝天然記念物標識等設置基準規則第4条に基づき、コンクリート製のものを、合計53本設置した。

説明板は、ダイヤプレート製のものを2基設置した。

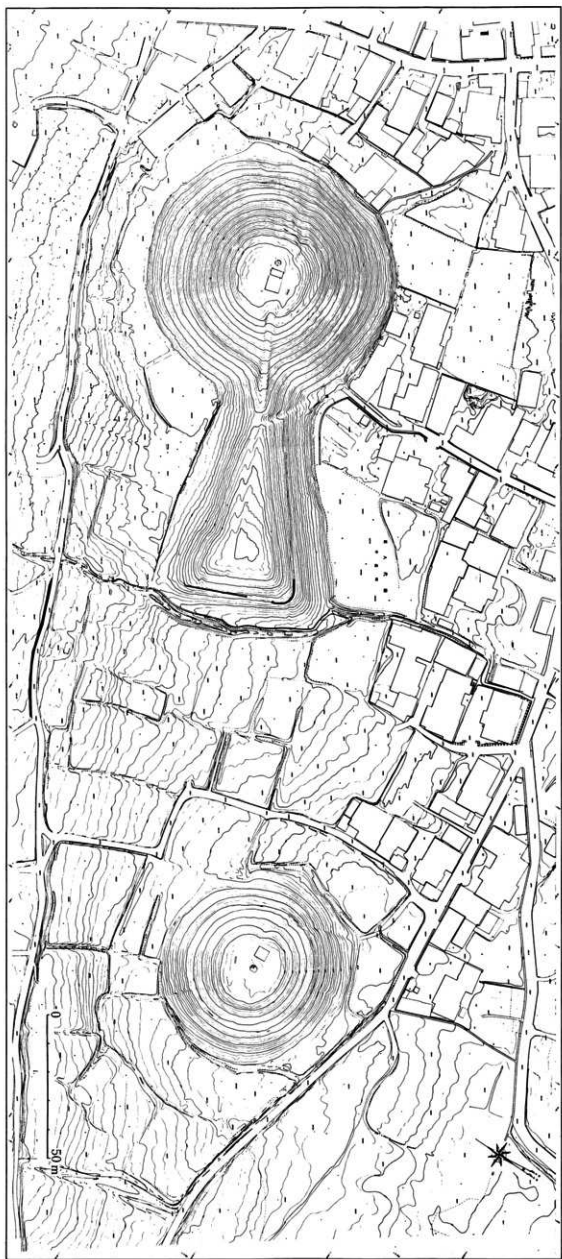


第4図
史跡境界
杭設置状況



第5図 説明板設置状況 (左 銚子塚古墳、右 丸山塚古墳)

第6圖 獅子塚古墳、丸山塚古墳測量圖



IV 昭和59年度保存修理事業の概要（第2年次）

1. 予算関係

59年度保存修理事業は、丸山塚古墳について国庫補助対象経費21,266千円で、考古学調査(2,712千円)、保存修理実施設計(1,950千円)、墳頂樹木間伐、東屋撤去、碑移設、桑抜根、墳丘造成、芝張、園路整備、石室位置表示、墳頂排水工事(16,499千円)、整備概報作成(105千円)を実施した。なお考古学調査以外の事業については、県土木部に依頼し、石和土木事務所で執行した。

2. 考古学調査

第1年次調査に引続き昭和59年6月11日より第2年次調査を実施した。第1～4号トレンチにおける墳丘裾部の確認、第6～11号トレンチを新たに設定しての墳丘裾部などの確認、石室の位置確認とその展開図作成事業などの内容であった。以下はその概要である。

墳丘および周溝

墳丘に設定したトレンチからは、墳丘の裾列石などの施設は全く検出されなかった。そのためトレンチで検出された黒色腐植土層と墳丘封土の接する付近を基準として墳丘規模の復元を行なうと、おおよそ東西72m、南北72mのほぼ円形の墳形が推定される。

墳丘の築成については現況の段を形成する付近で、僅かな平坦に近い面を検出した。これを築成面と考えることができるならば、2段築成といえよう。しかしこの位置は墳丘斜面の中央やや上方に偏在しており、また9号トレンチなどでの墳端近くに平坦面に近い様な状況が見られ、これらをどのように捉えるかによっては段数が変わってこよう。

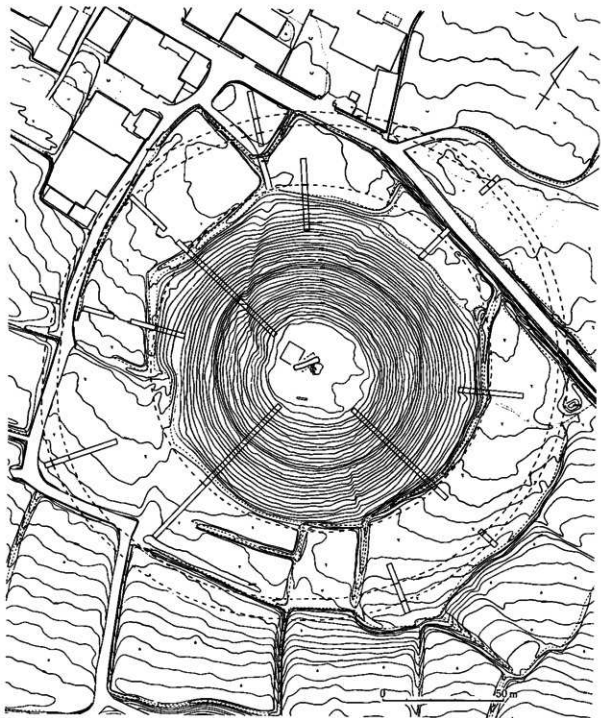
周溝はいずれのトレンチにおいても1.1～2.1mの間の埋土を取除いて周溝底と考えられる青灰色粘土層などに達する。周溝底は地形の傾斜に沿うように南側で高く北側で低くなる状況である。周溝の幅は北東側においてほぼ墳丘裾に沿うように幅15m前後で巡る。これに対し東および西側から南西側に向う部分は、周溝幅が墳丘裾より徐々に外側へ広がってゆき、南西側で最高に広くなり、約24mとなる。全面的な調査が実施されていないので不明であるが、何らかの施設が想定されるかもしれない。なお周溝のさし渡し距離は、南北111m、東西107mほどとなる。

石室

天井石の北側より4枚と南側より10枚の計14枚は両壁より架設されていたが、この間の5枚前後と推定される範囲は抜き取られているような状況であった。なお天井石に地表から到達する間の土層において、版築や被覆粘土などは全く確認されなかった。

天井石の周囲に控え積の礫が確認され、幅1.5m前後で石室を圍繞しているようである。なお掘方の範囲は確認できなかった。

石室は主軸をN-38-Eにとる竪穴式石室である。石室規模は底面で長さ5.55m、幅が北壁側で1.05m、南壁側で0.85m、高さが北壁側で0.85m、南壁側0.65mを計測し、矩形の平面形を呈する。しかも北、南壁のコーナー最下段の石が、内側に突出している。



第7図 丸山塚古墳墳丘平面図

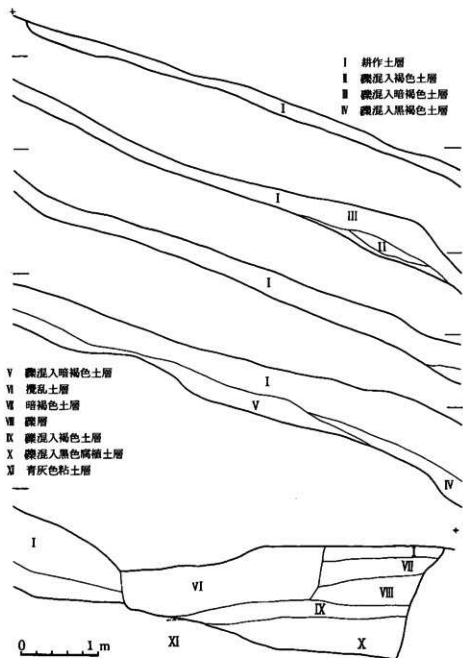
床の現状は南北方向がほぼ水平に近く、東西方向はやや湾曲し、かつ赤色顔料が塗布されていた。

石室は床面同様にほぼ水平に近い状況で造られ、まず第一段目に大型の石を据えた後一旦構築をやめたことが、赤色顔料の塗布の状況で分る。その後、二段面以上をやや小振の石材で持ち送り式に構築している。赤色顔料の塗布は、基底部の石のみ認められ、それ以外は見られない。ただし、東、西側壁の中央より直径3～4cmに赤色顔料で円文が描かれている。円文の数

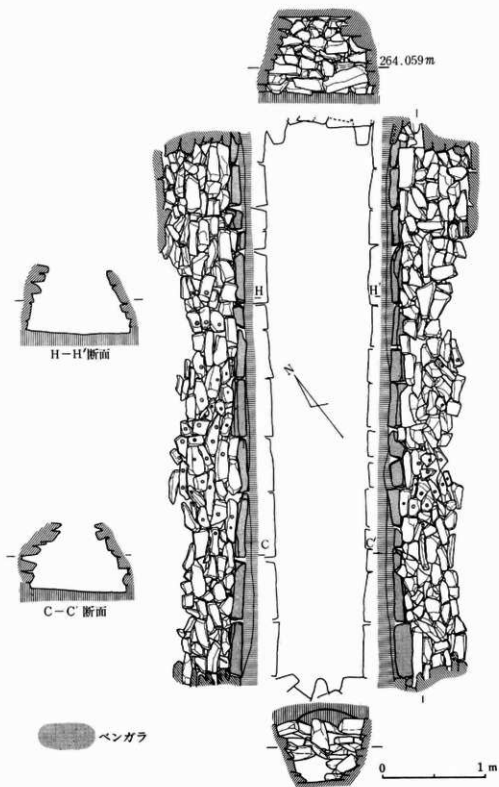
は東壁で11個、西壁で32個ほど確認された。また石室内の転落石に幾つかの円文の見られるものがあつた。このほか天井石の裏面に赤色顔料で書かれた「山」の文字が発見された。

石室の石材は山梨大学教授、理学博士西宮克彦先生に鑑定依頼したところ、輝石安山岩で、中道町地内で採集できることが明らかになった。

赤色顔料については東京国立文化財研究所の江本義理先生に鑑定依頼したところベンガラ



第8図 丸山塚古墳第4号トレンチセクション



第9図 丸山塚古墳石室展開図

(酸化第2鉄)であることが判明した。

出土遺物

二次に亘る調査によって鉄製品と埴輪片、陶磁器片が出土した。鉄製品は墳頂上の石室外から発見され、埴輪片、陶磁器片は各トレンチの墳端近くでほとんど出土している。埴輪片は各トレンチの最も下の黒色腐植土層から出土したものが大半で、このほかその後の開闢による礫や土から陶磁器とともに出土した状況であった。

鉄製品は現在長20.5cmほどの鐙と考えられる製品と、断面が楔状の刀子と考えられる製品、それに一端に直径1cmほどの袋部を付けた製品とがある。

埴輪片には円筒埴輪と形の特定できない器財埴輪と考えられる破片が見られる。

円筒埴輪の口縁部形態は、普通口縁と有段口縁、それに朝顔形円筒埴輪の可能性を残すものなどが見られる。タガはやや薄手で突出の大きいものと、突出の低い重厚なM字状を呈するものが見られる。スカシ孔は方型と巴との2形態が知られ、やや方形スカシの破片が多いようである。スカシ孔の孔数は4以上が考えられる。調整はハケメ調整を基調にしており、外面は一次縦ハケ調整後に第二次縦ハケ調整を施している。色調は褐色ないし茶褐色を基調とし、中に黒斑が見られる。埴輪の大きさは口径34~60cm、底径35~44cmと推定され比較的大型である。

円文処理の経過

石室の調査中に側壁に赤色顔料により描かれた円文などが見つかり、県文化課を通して文化庁に調査、措置法の指導を要請した。文化庁、東京国立文化財研究所、調査指導委員の先生方に指導、助言をいただき、写真撮影後に東京国立文化財研究所の樋口清治先生の指導を得て、当センター職員がパラロイドB72による樹脂処理を行なった。樹脂処理は剥落の著しい床面の壁際を中心に行ない、円文については剥落の可能性が少ないことから実施しなかった。樹脂処理後、石室内に砂を充てん、天井石を元に復し、その上を10cm前後の粘土で被覆して埋もどした。なおこの処理経過は次のとおりである。

9月13日、文化庁文化財保護審議会専門委員斎藤忠、文化庁主任文化財調査官河原純之先生調査

9月20日、文化庁文化財調査官加藤允彦、東京国立文化財研究所保存科学部長江本義理先生調査(赤色顔料分析)

9月27日 筑波大学教授 岩崎卓也先生調査

10月1日 井出佐重、野沢昌康、飯島彦、山本寿々雄、谷口一夫先生調査

10月16日 東京芸術大学名誉教授 日下八光先生調査

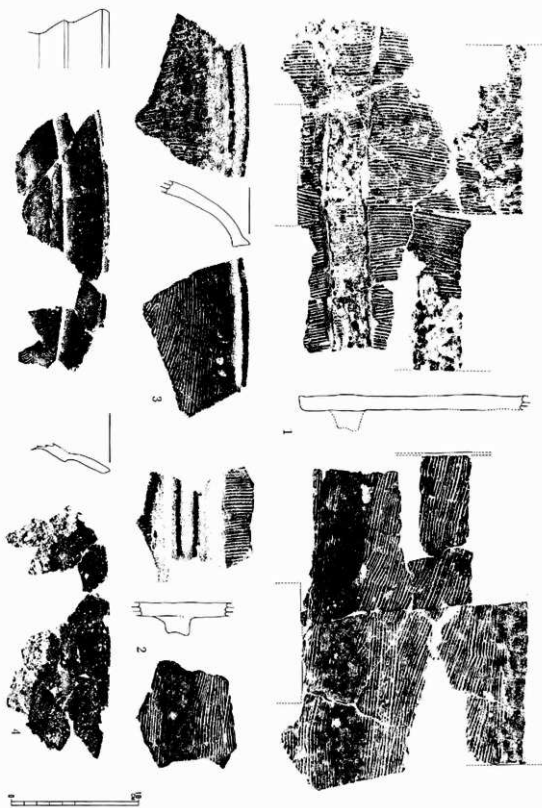
10月18日 明治大学教授 大塚初重先生調査

11月28日 東京国立文化財研究所江本義理先生、同第三修復技術研究室長樋口清治先生調査(保存科学)

12月14~18日 樹脂処理 12月19~22日埋もどし

3. 整備事業関係

古墳保存修理実施設計



第10圖 丸山塚古墳出土遺物

第一年度調査の結果をもとに、風土記の丘整備委員会にはかり、第二年度調査の結果で修正の上、実施設計を行なう方針で、(株)丹青社に実施設計書の作成を委託した。

古墳整備工事概要

墳頂上の樹木は墳丘および石室の保護などを考慮し、間伐した。なおこの間に松が枯死したため県林政課に検査を依頼したところ松食虫の被害に遭ったことが判明、合わせて伐採した。

墳頂上に建立されていた「郷民擁護碑」、「丸山之碑」、史跡指定碑の三碑は、丸山塚古墳の東側の園路入口の傍に移設した。

墳丘および周溝上の桑はすべて抜根することとし、一年次調査の結果から周溝内は重機、墳丘上は人力により取除いた。

墳丘造成工事は一年次、二年度調査の結果をもとに、現状に則して整備することを基本とした。調査で得られた墳端と推定される位置に縁石を巡らし、墳丘上は全体的に10cmの厚さで土盛を行なった。なお大きく削平されたと考えられる場所については、不自然にならない程度に周囲に合わせた。また墳頂上は石室の保護のためそれ以上の盛土とした。さらに盛土部分には崩落防止のため芝張を行なった。

園路の階段部分は疑木を使用して、東、西斜面に最小限の幅で取付け、砂利敷とした。

石室表示は天井石と控積の位置を表示した。このうち控積の範囲は縁石で表わしたが、南側と北側部分が不明なため現状で確認できる位置とした。天井石の表示は盛土の上に表示用の石材を中心線に揃えて据えた。また天井石と縁石の間は砂利敷とした。

墳丘上の排水は墳丘斜面の崩落を防止するため、中央からゆるやかな勾配を作り肩部にU字溝を圍繞してこれに流し、東、西階段付近に集水枿を設け、さらに園路階段の脇に透水パイプを埋設して墳端に設けた集水枿に落すようにした。また肩部には疑木による柵を取付けた。

V お わ り に

丸山塚古墳の墳形、規模などについて、今回の調査によっておおまかではあるが、把握できたと考えている。この中で石室内より円文が発見され話題となったが、この円文について紙幅の関係で詳述できなかった。石室の側壁と天井石などの関係からすれば、明治40年以前の可能性が窺えるが、この点に関しては副葬品などと共に後日詳細に触れるつもりである。

最後に調査にあたり文化庁、東京国立文化財研究所、調査指導委員、日下八光先生、風土記の丘整備委員、および現地などで指導助言等をいただいた多くの先生方に改めて感謝の意を表したい。

銚子塚古墳遠景



銚子塚古墳後部
修石？



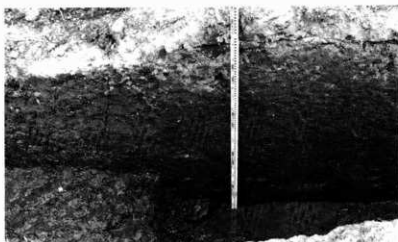
丸山塚古墳遠景



丸山塚古墳
トレンチ状況



丸山塚古墳第9号
トレンチ道輪
出土状況



丸山塚古墳石室





丸山塚古墳
階段設置状況



丸山塚古墳
縁石設置状況



丸山塚古墳
墳丘盛土状況



墳頂の碑（左 移設前、右 移設後）



丸山塚古墳
芝張状況



丸山塚古墳
石室表示状況

昭和60年3月20日 印刷

昭和60年3月30日 発行

国指定史跡

銚子塚古墳 附 丸山塚古墳

—保存修理事業第1・2年次概報—

山梨県埋蔵文化財センター調査報告第10集

発行 山梨県教育委員会

印刷所 合資会社ヨネヤ印刷

